

家族生活空間としての和室に関する研究

第2報 集合住宅における和室の使われ方と評価

日本女大 沖田 富美子

〔目的〕第1報と同様に、今後の住宅平面計画における和室の位置づけを明らかにするための資料を得ることが本研究の目的である。本報では集合住宅における和室の使われ方及び居住者の和室に対する評価について報告する。（1999年度家政学会大会研究発表要旨集）

〔方法〕横浜市及び首都圏の集合住宅居住者を対象に無作為抽出によるアンケート調査を実施した。調査配布数は284件、回収数115件、有効回答数は108件である。調査時期は1998年8月。調査対象住戸は2LDK10件、3LDK59件、4LDK36件、その他3件である。

〔結果〕全体的にみると、1)和室は1室の住戸が多いが、2～3室の住戸もある。2)和室の広さは4・5・6・8畳と種々の広さがあるが、6畳が中心となっている。3)和室は（一番大きい）居間に隣接、外部に面して設置されているものが多い。4)使用目的は主寝室、客間、子供室であるが、そのほか予備室、収納室、家事室等もあげられている。5)和風の照明器具（蛍光灯）、家具により和風のしつらいとしている住戸が多いが、和風・洋風の両方の家具をおいているとする住戸も多い。6)和室の位置については現状の位置を肯定し、部屋の様式の変更希望（和室から洋室）は少ない。7)和室の必要性としては必要とする世帯が多いが、どちらとも言えないとする世帯もある。1995年の調査結果（日本建築学会学術講演梗概集）よりも必要とするものが多い。8)今後の和室の方向としては和室のある住宅とない住宅とに分かれるという意見が多い。1997年度の調査（日本建築学会学術講演梗概集伊東、今井）では各住宅に少なくとも一つは和室があるとするものが多い。なお住戸タイプ、世帯主年齢、和室数等による違いについての分析も試みている。